

吉備国際大学研究紀要
(医療・自然科学系)
第25号, 85-93, 2015

中山間地域の高齢者と子どもの暮らしをまもる 住民相互の支援体制 (第1報)

— 高齢者の子どもとの絆を深める交流に対する意識 —

木村 麻紀, 澤田 和子, 岡本さゆり, 掛谷 益子,
田中 富子, 岡 和子, 太湯 好子

A Neighbourhood Support System to Protect the Lives of Children and the Elderly in Hilly and Mountainous Areas I — Recognising Interactions that Deepen the Ties between Children and the Elderly —

Maki Kimura, Kazuko Sawada, Sayuri Okamoto, Masuko Kakeya,
Tomiko Tanaka, Kazuko Oka, Yoshiko Futoyu

Abstract

This study aims to obtain basic data to support the creation of an environment wherein older people could participate in raising the children of a community. The study population comprised 473 elderly people who belong to a social organization for older people. We conducted a survey using a self-administered questionnaire that covered the respondents' basic attributes, their interactions with family members and neighbors, and their current interaction with the local children as well as what interactions with children they considered possible. The 394 people who answered all the questions with no missing values became the sample for analysis. The results showed that 60% of the people, which accounted for 72.3% of the late-elderly, considered themselves healthy. In terms of gender, 36.8% were male. With regard to family structure, 53.8% lived alone or as an elderly couple (not living with younger generations). In terms of interaction with family members including interactions with spouse, those living as a couple had more contact than those selecting "other," with those saying that they lived alone having the least family contact. As for interactions with neighbors, 57.4% said that they had such interactions on a daily basis, but only 6.6% had interactions with children. In contrast, 51.8% of the respondents wished that they could have interactions with children. It became clear that efforts to involve local elderly people, a human resource that could

be useful in raising children, would not only be a meaningful initiative for the elderly but also benefit the children of the community as well.

Key words : Intergenerational relationship, Elderly, Children

キーワード : 世代間交流, 高齢者, 子ども

1. はじめに

我が国の高齢者人口は増加の一途をたどり、平成25年の高齢化率は25.1%となった。そして、今後総人口が減少に転じても高齢化率は上昇を続け、平成72年には39.9%に達して、国民の約2.5人に1人が65歳以上の高齢者となる社会が到来すると推計されている¹⁾。また平均世帯人員が5.0人であった昭和28年から、平成25年には2.51人にまで低下しており²⁾、家庭内で世代間のつながりが残っていた時代に比べると、近年では世代間交流を持つことが難しくなっている。

平成6年の「21世紀福祉ビジョン」³⁾において、すでに世代間交流を通じて、生活や文化が伝承されるような環境づくりの重要性がうたわれている。藤原ら⁴⁾はシニアボランティアによる児童に対する読み聞かせの活動を通じて、高齢者には、近隣以外の友人・知人の増加や健康度自己評価の改善、児童には、高齢者に対する肯定的なイメージの維持にそれぞれ効果があったと報告している。また、核家族の多い都市部において、高齢者と小中学生が交流し、それぞれのQOLの向上を目的としたデイプログラムは、特に高齢者の孤立を防ぎ、心の健康に良い効果があることが示唆されたという報告⁵⁾がある。高齢化率が高く、子どもが少なくなっている地域では、人と人との交流が少なくなっている現状があるが、高齢者と子どもとの交流を図る機会を創ることで、互いの理解を深め合うことは重要なことである。

本研究において、高齢化率がすでに35.6%（平成25年）に達している地域をモデルに、老人クラブに所属

する高齢者と学童保育に通っている子どもたちとの絆を深める交流を通じて、高齢者に新しい活躍の場や、社会への参画の場を創ることを考え、まずは学童保育に通っている子ども達との交流に注目した。地域ぐるみで子どもを育てる環境を、高齢者の力を借りることで実現する支援体制の確立が急がれている。そこで、そのための基礎資料を得たいと考えた。

2. 方法

(1) 対象者

O県T市A、B両地区の老人クラブに所属する高齢者473名を対象とした。調査は、老人クラブの会長に研究の趣旨を説明して協力を得たのち、質問紙の配布および回収を一任した。その結果、411名から回答を得ることができ、回収率は86.9%であった。

回収できたもののうち、年齢に欠損があった8名と64歳以下であった9名を除外した394名を有効回答とし、分析対象とした。有効回答率は95.9%であった。

(2) 調査内容

- 1) 基本属性：年齢、性別、家族構成、仕事の有無を尋ねた。
- 2) 健康状態：治療中の病気の有無および健康状態について尋ねた。回答は健康だと思うから健康だと思わないの4段階で尋ねた。
- 3) 家族間の交流：食事、外出、会話について尋ねた。
 - ①食事については「一緒に食べる」「たまに一緒

に食べる」「あまり一緒に食べない」「一緒に食べない」の4段階で、②外出については「一緒に出掛ける」「たまに一緒に出掛ける」「あまり一緒に出掛けない」「一緒に出掛けない」の4段階で、③会話については「よく話をする」「たまに話をする」「あまり話をしない」「ほとんど話をしない」の4段階で尋ねた。

- 4) 近隣の人との交流の頻度と小学生の子どもとの交流の頻度：「日常的にある」「たまにある」「あいさつ程度」「ほとんどない」の4段階でそれぞれ尋ねた。
- 5) 老人クラブの活動頻度について、「月1回」「週1回」「週2~3回」「ほぼ毎日」「ほとんど参加していない」の5段階で尋ね、活動に対する満足度については、「満足している」「まあまあ満足している」「あまり満足していない」「満足していない」の4段階で尋ねた。また、活動内容については、①健康づくり、②ボランティア、③趣味活動、④伝承活動、⑤その他の項目から、複数回答で回答を求めた。
- 6) 地域の子どもの交流：地域の子どもの交流については、希望の有無と、できそうなことについて尋ねた。

(3) 分析方法

年齢については平均値を求め、前期高齢者と後期高齢者に分け、検討した。性別、家族構成、仕事の有無、治療中の病気、健康状態、老人クラブの活動頻度、活動への満足度は、割合で示した。活動内容については、全回答に対する割合を示した。子どもとの交流希望の有無と、属性との関連については χ^2 検定を行った。また家族構成、年齢、性別と家族や近隣、子どもとの交流の関連をみるために、二元配置分散分析を行った。いずれも有意水準は5%とした。分析にはSPSS 22.0を用いた。

(4) 調査期間：平成25年11月

(5) 倫理的配慮

老人クラブの会長に研究の主旨、目的、研究方法について説明をし、同意を得たのち、老人クラブの役員が個別に老人クラブ会員に質問紙を届け、その時に研究の主旨、目的を直接伝えた。調査票の提出をもって、本研究の参加に同意を得たこととした。調査票は無記名自記式で実施した。なお、本研究は吉備国際大学倫理委員会の承認を得て行った。

3. 結果

(1) 対象者の概況（表1）

対象者の平均年齢は78.6±6.4歳であり、前期高齢者が27.7%、後期高齢者が72.3%と、後期高齢者が7割以上を占めていた。家族構成をみると、ひとり暮らしの世帯と、夫婦のみの世帯とを合わせると53.8%であり、高齢者のみが占める世帯は半数以上であった。

仕事についてみると、仕事を有している人は26.4%であった。また、健康状態については、治療中の病気を持っている人が79.4%あり、8割の人は何等かの病気を有し、治療を受けていることがわかった。しかし、自分が健康だと思うかの問いには、62.9%の人が「そう思う」「ややそう思う」と回答し、高齢者は自分のことを比較的健康的だと思っていた。

次に、老人クラブの活動頻度についてみると、「月に1回」と答えた人が32.2%、「ほとんどしていない」と答えた人が41.4%であった。活動についての満足度は「満足している」「まあまあ満足している」を合わせると、63.2%であった。活動内容についてみると、健康に関することが31.7%と多いことが明らかになった。しかし、ボランティアや趣味活動、伝承活動に参加している人もみられた。

表1 対象者の属性

			(n=394)
性別	女	247	(62.7)
	男	145	(36.8)
	未回答	2	(0.5)
年齢	平均±SD		78.6±6.4
	範囲		65～96
	前期高齢者	109	(27.7)
	後期高齢者	285	(72.3)
家族構成	ひとり暮らし	78	(19.8)
	夫婦のみ世帯	134	(34.0)
	二世帯	57	(14.5)
	三世帯	63	(16.0)
	その他(きょうだい同居、四世代など)	38	(9.6)
	未回答	24	(6.1)
仕事の有無	なし	290	(73.6)
	あり	104	(26.4)
治療中の病気	無	72	(18.3)
	有	313	(79.4)
	未回答	9	(2.3)
自分が健康だと思うか	そう思わない	52	(13.2)
	あまり思わない	87	(22.1)
	ややそう思う	153	(38.8)
	そう思う	95	(24.1)
	未回答	7	(1.8)
老人クラブの活動頻度	ほとんど活動していない	163	(41.4)
	月1回	127	(32.2)
	週1回	29	(7.4)
	週2～3回	35	(8.9)
	ほぼ毎日	5	(1.3)
	未回答	35	(8.9)
老人クラブ活動の満足度	満足していない	19	(4.8)
	あまり満足していない	32	(8.1)
	まあまあ満足している	139	(35.3)
	満足している	110	(27.9)
	未回答	94	(23.9)
老人クラブの活動内容(複数回答)	健康づくり:125(31.7)、ボランティア:74(18.8)、趣味活動:44(11.2)、 伝承活動:23(5.8)		

単位:人(%)

(2) 家族や近隣の人との交流について

家族内交流のうち、食事については、「一緒に食べる」と回答した人が67.3%で最も多く、7割の人は家

族と食事をし、3割の人は家族と食事をする機会が少なかった。しかし、会話については、56.6%の人がよく話をすると答えた。外出については、「一緒に出掛け

る」「たまに一緒に出掛ける」を合わせると 65.5%であった。(表2)。

近隣との交流については、「日常的にある」と答えた人が 57.4%で最も多かった(表3)。

次に、家族や近隣との交流と家族構成、年齢、性別についてみた。

表2 家族との交流について

(n=394)、単位:人(%)

食事		人数	割合(%)
一緒に食べない		29	(7.4)
あまり一緒に食べない		15	(3.8)
たまに一緒に食べる		51	(12.9)
一緒に食べる		265	(67.3)
未回答		34	(8.6)
外出		人数	割合(%)
一緒に出かけない		46	(11.7)
あまり一緒に出かけない		52	(13.2)
たまに一緒に出かける		151	(38.3)
一緒に出かける		107	(27.2)
未回答		38	(9.6)
会話		人数	割合(%)
ほとんど話をしない		16	(4.1)
あまり話をしない		37	(9.4)
たまに話をする		89	(22.6)
よく話をする		223	(56.6)
未回答		29	(7.4)

表3 近隣との交流について

(n=394)、単位:人(%)

ほとんどない	7	(1.8)
あいさつ程度	53	(13.5)
たまにある	96	(24.4)
日常的にある	226	(57.4)
未回答	12	(3.0)

家族との交流については、食事は「一緒に食べない」を0とし、「あまり一緒に食べない」「たまに一緒に食べる」「一緒に食べる」を0～3の数字を割り当て、二元配置分散分析を行った。外出、会話も同様に、外出は「一緒に出掛けない」「あまり一緒に出掛けない」「たまに一緒に出掛ける」「一緒に出掛ける」を0～3、会話は「ほとんど話をしない」「あまり話

をしない」「たまに話をする」「よく話をする」を0～3の数字を割り当て、分析を行った。家族との交流は、食事、外出、会話のいずれにおいても、家族構成のみに主効果が認められた(p<0.01)。近隣との交流について、「ほとんどない」「あいさつ程度」「たまにある」「日常的にある」に0から3の数字を順に割り当て関連をみた。家族構成と年齢との関連はみられなかったが、性別では男性の方が有意に少なかった。(図1・2)。

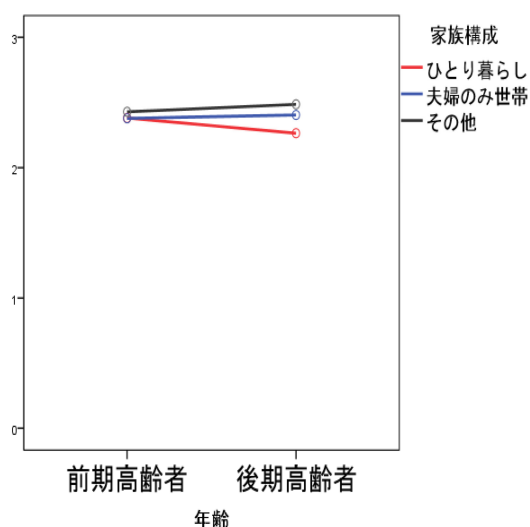


図1 近隣との交流(年齢)

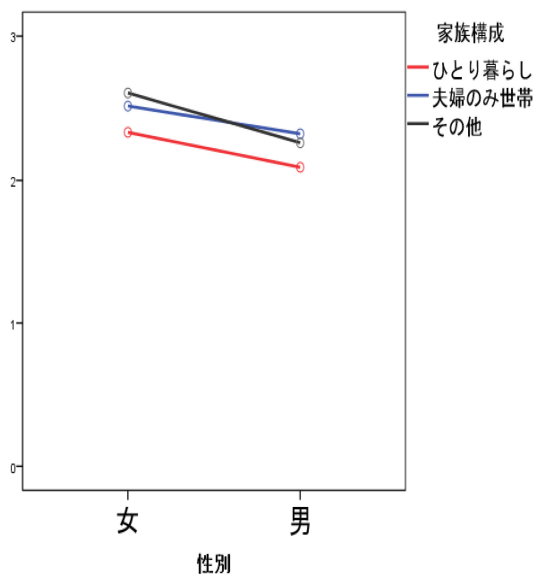


図2 近隣との交流(性別)

(3) 子どもとの交流と希望について

日頃の子どもの交流について、「ほとんどない」「あいさつ程度」を合わせると69%であった(表4)。しかし、子どもと交流を持つことを希望すると答えた人は半数以上(51.8%)いた。また、希望のある人によどのような交流が持てそうかと尋ねたところ、「一緒に遊ぶ」「伝承活動」と答えた人が多かった(表5)。

表4 子どもとの交流について

(n=394)、単位:人(%)

ほとんどない	131	(33.2)
あいさつ程度	141	(35.8)
たまにある	65	(16.5)
日常的にある	31	(7.9)
未回答	26	(6.6)

表5 子どもとの交流希望について

(1) 交流希望

(n=394)、単位:人(%)

無	123	(31.2)
有	204	(51.8)
未回答	67	(17.0)

(2) どんな交流が持てそうか(複数回答)

一緒に遊ぶ	103	(26.1)
勉強や宿題	7	(1.8)
見守り	38	(9.6)
伝承活動	99	(25.1)
その他	18	(4.6)

次に、子どもとの交流と家族構成、年齢、性別についてみた。「ほとんどない」「あいさつ程度」「たまにある」「日常的にある」に0から3の数字を順に割り当て関連をみたところ、ひとり暮らしの後期高齢者は子どもとの交流が有意に少なかったが、性別では関連はみられなかった(図3・4)。

(4) 子どもとの交流希望と高齢者の属性との関連

子どもとの交流希望の有無と属性の関連についてみると、年齢と性別では、いずれも有意差はみられなかった($p>0.1$)。また、仕事のない人とある人では、仕事を持っている人のほうが有意に希望を持っていた($p<0.05$) (表6)。健康状態から見ると、健康状態をよいと感じている人のほうが有意に希望を持っていた($p<0.05$) (表7)。

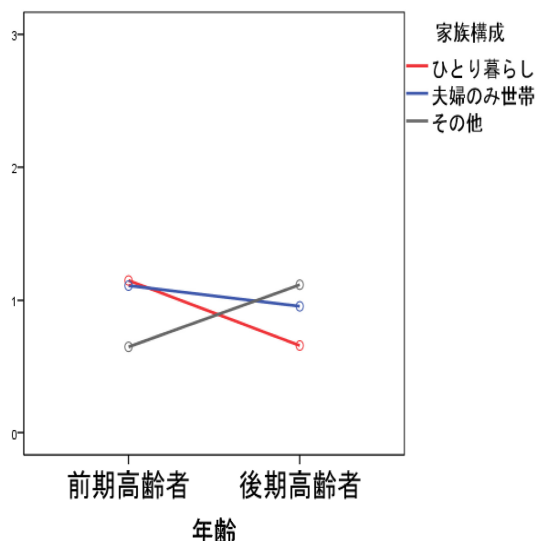


図3 子どもとの交流(年齢)

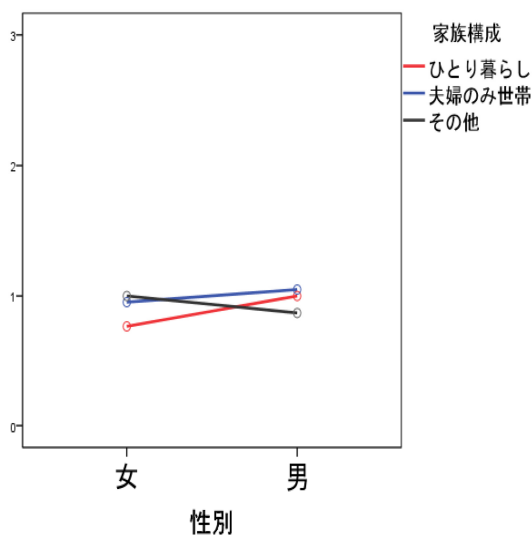


図4 子どもとの交流(性別)

表6 仕事の有無と子どもとの交流希望

(n=327)、単位：人(%)

		仕事の有無				p値
		無		有		
交流希望	無	99	(80.5)	24	(19.5)	.028
	有	141	(69.1)	63	(30.9)	

表7 健康状態と子どもとの交流希望

(n=322)、単位：人(%)

		自分は健康だと思うか								p値
		そう思わない		あまり思わない		ややそう思う		そう思う		
交流希望	無	23	(18.9)	29	(23.8)	44	(36.1)	26	(21.3)	.024
	有	18	(9.0)	37	(18.5)	90	(45.0)	55	(27.5)	

(5) 子どもとの交流希望と近隣との交流との関連

子どもとの交流希望の有無と日頃の近隣との交流の頻度との関連について、「たまに」と「あいさつ程度」とを合わせ、3群にまとめて分析した。日頃から近所づきあいがある人の方が、子どもとの交流希望を有意に持っていた ($p<0.05$) (表8)。また、子ども

との交流希望の有無と日頃の子どもとの交流の頻度との関連について、「たまに」と「あいさつ程度」をまとめ、3群で分析すると、日頃から子どもとの交流頻度の多い人の方が、有意に交流希望を持っていた ($p<0.01$) (表9)。

表8 普段の近隣との交流の頻度と子どもとの交流希望

(n=320)、単位：人(%)

		近所づきあい頻度3群						p値
		ほとんどない		たまに、あいさつ程度		日常的に		
交流希望	無	4	(3.3)	51	(42.5)	65	(54.2)	.043
	有	1	(0.5)	70	(35.0)	129	(64.5)	

表9 普段の子どもとの交流の頻度と子どもとの交流希望

(n=311)、単位：人(%)

		子どもとの交流頻度3群						p値
		ほとんどない		たまに、あいさつ程度		日常的に		
交流希望	無	60	(51.3)	55	(47.0)	2	(1.7)	.001
	有	51	(26.3)	117	(60.3)	26	(13.4)	

(6) 子どもとの交流希望と老人クラブ活動との関連

子どもとの交流希望の有無とクラブ活動の頻度について、「ほとんどない」と「月1回」を合わせ3群に分けて関連をみると、週1~3回程度の活動をしている人の子どもの交流希望は有意に高いとの結果

であった ($p<0.05$) (表10)。また、子どもとの交流希望の有無と活動についての満足度について、「満足している」と「満足していない」の2群に分けて関連をみたところ、子どもとの交流希望がある人の方が、老人クラブの活動に対する満足度が高い傾向に

あった ($p < 0.1$) (表 11) .

表 10 老人クラブの活動頻度と子どもとの交流希望

(n=299)、単位：人 (%)

		クラブ活動頻度3群						p値
		ほとんどない, 月1回		週に1~3回		ほぼ毎日		
交流希望	無	99	(87.6)	12	(10.6)	2	(1.8)	.026
	有	140	(75.3)	43	(23.1)	3	(1.6)	

表 11 老人クラブ活動の満足度と子どもとの交流希望

(n=276)、単位：人 (%)

		活動満足2群				p値
		満足していない		満足している		
交流希望	無	22	(22.2)	77	(77.8)	.091
	有	24	(13.6)	153	(86.4)	

4. 考察

機会は少なくなっていることがうかがえた。

(1) T市A, B地区の高齢者の特徴

本研究の対象者である高齢者の特徴をみると、後期高齢者が7割以上を占めていた。治療中の病気を持っている人が8割近くあったが、自分の健康状態をよいと感じている人の割合は「そう思う」「ややそう思う」を合わせると6割以上あり、概ね健康状態がよい集団であった。

家族構成についてみると、夫婦のみの世帯が最も多く、次いでひとり暮らしの世帯が多かった。高齢者のみの世帯が半数以上を占めていたが、家族との交流については、食事を一緒に食べる、一緒に出掛ける、話をするという割合が多く、よく保たれていた。

しかし、ひとり暮らしの人は近隣との交流は保てていても、家族との交流が少ないということが明らかとなった。

近隣との交流については、日常的にあると答えた人の割合 (57.4%) が最も多かったが、子どもと日常的に交流を持っている人は少なく (6.6%)、家族や近隣との交流は保たれているものの、子どもと交流を持つ

(2) 子どもとの交流についての高齢者の意識

子どもと交流を持ちたいと希望する人は半数以上おり、その中でも、一緒に遊んだり、伝承活動を通じて交流が持てると考えている人が多かった。

子どもとの交流希望との関連からみると、自分を健康だと感じている人、老人クラブ活動の頻度が高い人、日頃から子どもとの交流を持っている人がより交流希望を持っていることが明らかとなった。西村ら¹⁰⁾は各老人クラブ員の嗜好と実際の活動のマッチングが満足度に貢献することを明らかにしている。今回の調査の対象となった高齢者では、子どもとの交流希望がある人の方が、老人クラブ活動に対する満足度が高い傾向にあった。老人クラブに所属する高齢者と、子どもとの交流の場を創ることは、高齢者に関心のあることを老人クラブ活動の目的にすることとなり、高齢者の活動の満足度を高めることになる。

亀井ら⁶⁾は多世代交流を取り入れたプログラムは、高齢者自身の役割や能力を生かすことになり、高齢者の有用感が促進されると述べている。このことから

も、高齢者と子どもが、一緒に遊ぶことや、伝承活動を通じて、互いの理解を深めることのできる場を設定することは有用である。また、元気で活動的な高齢者が社会の中で役割を持ち、それを果たしていくことは、高齢者自身が社会とのつながりを保ち、より良好な健康状態を維持することにつながるのでは

ないだろうか。

今後は、子どもと保護者に対する調査結果も踏まえて、高齢者と子どもの双方にとって効果的な交流の場を創設することを検討していく必要があると考えている。

(引用・参考文献)

- 1) 内閣府 平成 25 年度版高齢社会白書 第 1 章 高齢化の状況
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/zenbun/25pdf_index.html.(last accessed 2014/09/06)
- 2) 厚生労働省 平成 25 年国民生活基礎調査の概況 I 世帯数と世帯人員数の状況
mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13(last accessed 2014/9/4)
- 3) 国立社会保障・人口問題研究所 21 世紀福祉ビジョン～少子・高齢社会に向けて～
<http://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryu/no.13/data/shiryu/souron/18.pdf>(last accessed 2014/9/4)
- 4) 藤原佳典他：児童の高齢者イメージに影響を及ぼす要因 “REPRINTS”高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から、日本公衆衛生雑誌, 54(9), 615-625, 2007.
- 5) 藤原佳典：シニア読み聞かせボランティア“りぷりんと”の活動～高齢者の世代間交流型ヘルスプロモーションプログラムの効果, コミュニティケア, 9(8), 60-64.
- 6) 亀井智子他：都市部世代交流型デイプログラム参加者の 12 か月間の効果に関する縦断的検証—Mixed methods による高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点を当てて—, 老年看護学, 14(1), 16-24, 2010.
- 7) 森田智子他：A 町内の高齢者の老人力（知恵・経験・技）に関する実態調査—県民運動実践活動より—, 関西看護医療大学紀要, 4(1), 14-22, 2012.
- 8) 糸井和佳他：地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果—文献レビュー—, 日本地域看護学会誌, 15(1), 33-43, 2012.
- 9) 上村眞生他：世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究, 幼年教育研究年報, 29, 65-71, 2007.
- 10) 西村大悟他：ボランティア活動からみる、これからの老人クラブ活動, 東海大学健康科学部紀要, 15, 41-47, 2009.